

英語科の主張

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池田, 卓弥, 植木, さつき, 小池, 智美 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00028072

英語科の主張

池田卓弥 植木さつき 小池智美

1 教科で育みたい人間像

異言語・異文化間の対話を可能にする言語の中で英語は特に汎用性が高く、英語を使用することは、英語を母語として話す人々とだけでなく、公用語または準公用語として話す人々、そして英語を外国語として話す人々とのコミュニケーションを広げる。このことは、様々な言語や文化を背景とした、多様な思いや考えをもちながら生きる世界中の人々と自分をつなぐことを可能にする。

世界の人々に自分の思いや考えを発信したり、相手の思いや考えを受信したりすることは、人々の思いや考え、文化などを知ることにつながる。さらに、考え方や文化の類似点・相違点を実感することで、自分の価値観や文化を再認識することもできるだろう。

このようなことをふまえ、英語科で育みたい人間像を「世界の人々とつながる人」とした。子どもたちが、英語を用いて自分の思いや考えを発信したり、異言語・異文化をもつ人々の思いや考えを受信したりすることができる人になることを願っている。

2 教科ならではの文化

英語科ならではの文化とは、「自分の思いや考えを伝え合うような英語でのやりとりを通して、『伝わった』『わかった』という達成感や充実感を味わい、さらに、積極的にコミュニケーションを図ろうとすること」と考える。また、その積み重ねにおいて、知識(knowledge)・態度(attitude)・技能(skill)を有機的に結びつけながら、言語的にも情意的にも豊かなコミュニケーションを楽しんでいくことができるだろう。

技能が優れていても、自他の言語や文化に対する知識がなければ、真意が伝わらず、相手に誤解を与えることもある。また、知識や技能があっても、異言語・異文化をもつ相手とコミュニケーションを図りたいという態度がなければ、世界の人々とつながることは難しいだろう。私たちは異言語や異文化に対する多面的な知識、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度、聞く・読む・話す・書くなどの技能（英語運用力）を総動員しながら、思いや考えを英語で伝え合うことで、多様な語彙使用を促し、英語表現を主体的に学んでいく。

そして、母語ではない英語を用いて思いや考えを表現していく際には、異言語・異文化をもつ人々に思いを馳せ、そのような人々とのかかわりについても考えが及んでいくだろう。

3 授業づくりで大切にしていること

英語科が願う子どもの学びとは、自分の思いや考えを伝えようとしたり、異言語・異文化をもつ相手を理解しようとしたりして、コミュニケーションを図ろうとすることと捉えている。英語で自分の思いや考えを伝えるために、既知の単語や表現、ジェスチャーを使って、粘り強く伝えようとするのを願っている。子どもたちは、相手の様子を見て、使う単語や表現を選んだり、時には相手の文化や関心に配慮し、伝える内容を精査したりすることで、より相手を意識した豊かなコミュニケーションを目指す。

感情を揺さぶり、伝えたい・知りたいという、子どもたちのコミュニケーション意欲をかき立てるような題材を選定すると共に、目的をもって思いや考えを伝え合う場面を題材構想の中に設定していきたい。このことにより、子どもたちは、目的を果たすために言葉を主体的に選択しながら思いを伝え、相手の真意を推し測り、伝わったり伝わらなかったりした経験を積み重ねていく。その際、言葉を学びつつ、新しい思いや考えに出会う。自分の価値観や生活経験を基にした思いや考えを、相手の立場や状況、思いや考えに照らして伝え合うことにより、英語の表現が多様になったり幅広くなったりすると同時に、コミュニケーションの本質を体感していく。そのような体験的なやりとりから言葉を主体的に学んでいくことや、異言語・異文化をもつ人々とのかかわりについて深く考えることが、子どもたちを育む一歩となることを願っている。

授業実践

1 題材名 “Should we respect our culture or other cultures?” （第 3 学年）

2 題材の目標

ピクトグラムについて日本の文化を大切にするという立場と、海外の文化を受け入れるために日本文化を変えていこうという立場から、自分の立場を明確にして考えを伝え合うことを通して、コミュニケーションをとるときに異文化に対して配慮したり、相手の意見をふまえたりしながら自分の意見を伝えることができたという達成感を味わうとともに、よりよいコミュニケーションに対する考えを深める。

3 題材観

(1) コミュニケーションの大切さ

生活の中でコミュニケーションは欠かせない。日頃より私たちは、家族・友だち・同僚などと互いの考えや思いを共有するためにコミュニケーションをとっている。コロナ渦であっても、「友だちや仕事の仲間と会食したい！」という思いは単純に食事を楽しみたいという理由だけではなく、誰かとコミュニケーションをとりたいという、より大きな私たちの欲求によるものではないかと考える。互いの考えや思いを伝え合うことは時間を忘れるほどの楽しさであり、互いの人となりを知るためにもコミュニケーションは欠かせないものである。また、コミュニケーション不足によって誤解が生まれることで人間関係に亀裂が生じ、大惨事を招くことを私たちは多かれ少なかれ経験をし、コミュニケーションの重要性を理解している。

私たちは誰もが、内集団バイアスという心理現象をもっている。私たちは日本という国、または故郷、勤務先などさまざまな集団に所属している。内集団バイアスとは自分が所属している集団がより優れていて、価値があるのだと思込むことを意味する。自分が所属していない外集団に所属する人たちとコミュニケーションをとり、多文化の価値観にふれることで、私たちは新しい価値観を知ったり、自分たちの価値観が本当に正しいのかどうか考えたりするきっかけとなる。コミュニケーションは私たちの考えや意見が偏見とならないためにも必要な行動である。そして、母語ではない外国語を使ってコミュニケーションをとることで言語そのものを学習するとともに、新しい考えや発想、価値観にふれる機会ともなるだろう。

同じ日本人であっても価値観は異なり、コミュニケーションをとらなければ、互いを誤解したままとなってしまう。ましてや異言語・異文化をもつ人が相手となれば、真意を伝えるためにも粘り強くコミュニケーションをとる必要があることは言うまでもない。

(2) インバウンドに見られる日本の姿勢

今や日本経済を大きく支える要素となっているインバウンド。銀座大通りには外国人向けの免税店が建ち並び、多くの外国人観光客を目にする。2008年に観光庁が設置され、日本政府は観光産業に力をいれてきた。発足 10 周年を迎えた 2018 年に、当時の石井大臣が次のような内容のスピーチを官公庁職員に対して行った。「少子高齢化が加速するこれからの日本の将来を見据えたとき、我が国の成長に大きく貢献できる分野として、観光は大きな期待が寄せられている。観光庁は旅行者の目線に立ち、外国人も含めさまざまな方々が旅行しやすい環境をつくることが仕事である。また、毎年 3000 万人以上の外国人観光客が日本を訪れる時代であることを前提に、日本のさまざまなシステムやルール、さらには国民の意識が対応できているのか、常に問いかけ、見直しをしていくべきだ」と述べた。2021年に東京オリンピック・パラリンピックが開催される予定であることも大きな利益を得られることが予想される。そのため、国をあげて国民の意識を高め、外国人訪問者を歓迎するべきであるという姿勢が伝わってくる。また、2020年1月1日の観光庁長官田端浩氏による新春の挨拶では、「2020年は、訪日外国人旅行者が4000万人等の目標達成に向けた総仕上げの1年であることから、訪日外国人旅行者にとってストレスフリーで快適な旅行環境の実現を進めていく」という発言があった。外国人旅行者にとってストレスフリーな環境とは、言語的な問題だけでなく、「日本に来てよかった」「もう一度来たい」という日本での旅行満足度を保証するためのものであると考えられる。東京オリンピック・パラリンピック招致委員会での最終演説で滝川クリステル氏によるスピーチで「お迎えするお客様を大切に」と表現されたように、外国人訪問者を大切に扱い、不愉快な思いをさせないことが重要であると東京都や日本オリンピック委員会、日本政府は捉え、日々努力をしている。また、観光庁は直接外国人

観光客と接する観光産業やサービス業に携わる人たちだけでなく、日本国民全員に観光先進国としての意識をもつように求めている。つまり、外国人訪問者を歓迎することに協力をしてほしいということであろう。

(3) 世界中の異文化と価値観を知ること

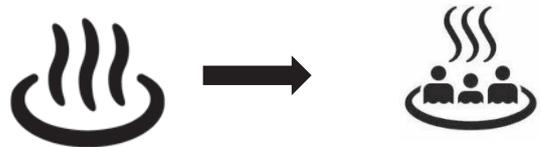
世界中の人たちとコミュニケーションをとることは楽しいことであるが、文化や価値観が異なることで文化的摩擦、衝突が起きることは珍しくない。例えば、数年前に日本の企業が洗濯洗剤の広告キャッチコピーとしてネット上に#BeWHITEと載せたところ、欧米諸国から「人種差別ではないのか」と批判を受け、撤回するということがあった。日本語での、「白い」は清潔な意味を連想させるために使われることばだが、英語では「白人になろう」という意味で伝わってしまった。異言語による誤解もあるが、日本では人種差別と誤解されるようなことばは避けるべきだという認識が乏しい現状も重なり、起きてしまったとも考えられる。このような誤解を生まないためにも、どのようなことばが世界中の人たちに誤解されてしまったり、衝突を生んでしまったりするのか知っておく必要がある。

①ナチスに代表される異なる歴史認識

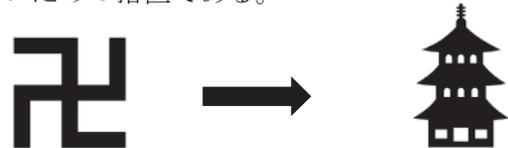
ドイツでは、ナチスを連想させるような言動は法律によって規制されていたり、アメリカでは、ナチス式敬礼をして写真を撮り、ネットにあげた高校生たちに対して厳しい措置がとられたりするなど世界ではナチスを連想させるような言動には厳しい目が向けられている。日本では、人気アイドルグループのハロウィーンライブ衣装がナチス軍服を連想させるということで、アメリカのユダヤ人団体や欧米諸国のメディアから非難を浴びた。その結果、プロデューサーが謝罪をした。さらに、在日イスラエル大使館がアイドルグループのメンバーをホロコーストに関する特別セミナーに招待した。また、ポケモンで使われていた卍のマークがナチスのハーケンクロイツを連想させるという抗議を受け、使われなくなったという事例もある。このように、ナチスを承認したり連想させたりするような言動は世界から批判される対象となっている。

②ピクトグラム変更

国土地理院では、訪日外国人旅行者の円滑な移動や快適な滞在のための環境整備を図り、観光立国実現や2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会の円滑な開催などに資するため、平成26年5月に「外国人にわかりやすい地図表現検討会」を設置し、地図に記載する地名等の英語表記ルールや外国人にわかりやすい地図記号の検討を進めてきた。結果として、多くのピクトグラムが変わった。例えば、従来の温泉のピクトグラムが温かい食べ物を連想させるという意見から、人が温泉に入っていることが一目でわかるものに変更された。



また、寺院を表す卍がナチスのハーケンクロイツに見えるという意見をふまえ、変更された。このような変更は日本を訪れる外国人全員にとって理解しやすいためだけでなく、不愉快な思いをさせないための措置である。



しかしながら寺院のピクトグラムに関しては、日本は長い間地図記号としても卍マークを使用してきた。日本文化を正しく理解してもらうことも大事なのではないかという意見もあり、賛否両論ある。自分たちの文化を尊重し理解してもらうことに全力を注ぐのか、それとも世界の全ての人に不愉快な思いをすることなく日本での滞在を楽しんでもらうために日本で以前から当たり前に使われてきたものを変更するのか……。日本の文化を大切にするという立場や海外の文化を受け入れるという立場など意見が分かれるだろう。難しい問題ではあるが、異言語・異文化をもつ世界の人々とかかわるときには、文化や価値観の相違によって衝突が起きることもある。多面的・多角的に現状を捉え、平和的解決をしていくことは世界の人々とつながる機会が多くなっているからこそ必要なことである。

参考文献：笹島茂(2011)『CLIL 新しい発想の授業～理科や歴史を外国語で教える!?!～』 三修社
 静岡大学教育学部附属静岡中学校(2019)『対話が深める教科の学び』 明治図書
 三浦孝・中嶋洋一・池岡慎(2006)『ヒューマンな英語授業がしたい!』 研究社
 ムーギー・キム(2020)『世界トップエリートのコミュカの基本 ビジネスコミュニケーション能力を劇的に高める 33の絶対ルール』 PHP 研究所

参考資料：国土交通省観光庁公式サイト <https://www.mlit.go.jp/kankocho/>
国土交通省国土地理院公式サイト <https://www.gsi.go.jp/top.html>
Bloomberg Japan Company's #BeWhite Ad Sparks Controversy (Shoko Oda and Ayaka Maki)
<https://www.bloomberg.com/news/articles/2019-06-14/bewhite-ad-trips-up-japan-company-pushing-families-to-do-chores>

4 新学習指導要領との関連

(3) 話すこと [やり取り]

ウ 社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことについて、考えたことや感じたこと、その理由などを、簡単な語句や文を用いて述べ合うことができるようにする。

5 題材構想 (全 8 時間)

- (1) ピクトグラム問題を知る
- (2) ディベートで意見を伝え合おう
- (3) ディベートを振り返り、自分の意見を整理しよう
- (4) みんなで意見を交換しよう

6 本題材でみられた子どもたちのあらわれ

(1) ピクトグラム問題を知る

授業者は子どもたちの率直な感想や意見を引き出すために、ナチス軍服を連想させる衣装を着ているアイドルの写真を子どもたちに見せた。子どもたちはこの衣装がどのような事態に発展していったのか予想した。

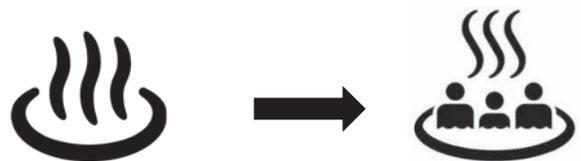


子どもたちの大多数は「かわいい！cute!」という反応を示した。その一方で、なぜこの写真を見せられているのかという反応もあった。

この衣装を着たことが国際的にどのような問題に発展したのかを知るためにニュース動画 (<https://www.youtube.com/watch?v=UREV-RaB1o>) を見た。その動画を見た子どもたちは、この行為が深刻な問題となったことに気がついた。

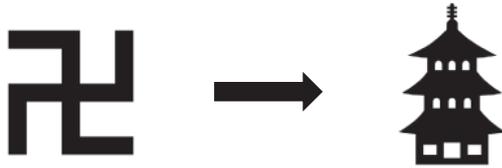


ナチスを想起させるような物は非難される対象となることを知った子どもたちに授業者は東京オリンピック・パラリンピック開催に向け、多くの外国人が日本での滞在を楽しめるようにするために、ピクトグラムが変更されたことを伝えた。



「温泉のマークがなぜ変わったのか？」と疑問をもった子どもたちが多かったため、授業者は次のような情報を伝えた。“Many foreigners think the symbol means hot drinks, like coffee and soup.”すると子どもたちは「見えるかもしれない」という反応を示した。また、ALT が “It looks like seaweed.”と言ったことに対しても「確かに、海

底でワカメがゆらゆらしているようにも見える」と納得した。次に、授業者は寺院のピクトグラムはナチスのハーケンクロイツを連想させる理由があるため変更されたことにも言及した。



子どもたちはこのことについての率直な感想を「追求の記録」に感想を書いた。

- ・ It's difficult problem, but Keyakizaka members shouldn't have worn the costume. We should never hurt someone.
- ・ We don't have to change manji symbol because it has been used for a long time in Japan. It's different from the Nazis' symbol.
- ・ We should know Japanese culture more. We don't want trouble with foreigners.
- ・ ユダヤ人を傷つけないためには変えた方がよいと思うが、変えたら日本の文化を尊重しないことになる。互いの文化を尊重するのが世界の標準的な考えではないのか
- ・ 初めて卍の意味と世界には誤解を招くということを知った。マジ卍と言っていたことが恥ずかしい。軽々しく使うものではない

など

(2) ディベートで意見を伝え合おう

授業者は子どもたちに多様な考えにふれてほしいという願いから、ディベートを行うことにした。テーマは“Should we change the symbol? Or not?”とした。ディベートを進めていく中で、どのような単語や表現を使えば言いたいことが伝わるのかについても、友だちやALTに相談しながら追求していった。次のような意見がディベートで出された。

AFFIRMATIVE

(ナチス、ユダヤ人と関連した意見)

- ・ 卍 symbol hurts Jewish people.
- ・ If we use 卍 many times, Jewish don't feel good.
- ・ Cultures make people happy, but when Jewish victims distress manji, we should change the pictogram.
- ・ We should consider Jewish people because they were victims of Natis genocide.

- ・ We should prevent this kind of problem from happening again.
- ・ If you were victims, what would you feel when you see manji symbol?
(地図記号という視点から出た意見)
- ・ 卍 is difficult for foreigners to understand.
- ・ We should make it easy for foreigners to understand map symbles.
- ・ We learned that cultures must change with the time because the time changes when we were second grade students.

など

Negative

(ナチス、ユダヤ人と関連した意見)

- ・ The manji has been used longer than Nazis, so we don't have to change it.
- ・ The manji symbol and the Nazis symbol are not the same. Look hard!
- ・ Manji symbols has a long history, so we can't change it easily.
(文化という視点から出た意見)
- ・ The manji is a Japanese tradition. We can't change it.
- ・ Japanese people should protect Japanese culture.
- ・ It's also a symbol of Buddha. If we change it, the meaning will disappear.
- ・ We can tell foreigners about the true meaning of the manji symbol.

など

ディベートを終えた子どもたちは様々な考えや意見にふれ、自分自身の考えをまとめた。授業者は次時に Should we change the symbol?について全体で意見交換をすることを伝えた。以下はディベートを終えた子どもたちの「追求の記録」である。

(ディベートについて)

- ・ 自分とは反対の立場のチームに入ってしまったが、逆にディベート中に出てくる意見を予想することができた。対策ができた
- ・ ディベートをするためにはもっと自分が卍のこと、日本文化のことを知らないといけない

(ディベートの内容について)

- ・ Culture's world is the survival of the fittest.
(文化の世界も弱肉強食と言いたいことをALTに相談し、提示された表現)
- ・ 傷つく人がいるから、マークを変えればいけ

- ど、外国人にふりまわされている気がする
 - ・フランスの風刺画 (イスラム教の予言者ムハンマドをフランスの雑誌が描いたことで、イスラム教徒によるデモや事件が起きたことを前題材で扱った) はイスラム教徒への配慮がなかった。卍マークもユダヤ人への配慮がないと言われてもしょうがない
 - ・ Cultures should be changed to be accepted by all people. All people are equal and should be happy. We can't judge which is good. Both changing and no changing are good. But we should think which is the best.
 - ・ Japanese people must talk with Jewish people about 卍. If Jewish people say, "Japan can use 卍, We can use it forever."
- など

(3) ディベートを振り返り、自分の意見を整理しよう

ディベートを終えた子どもたちは、様々な意見に出会い、自分の意見を整理した。中には、ずっと使われ続けてきた卍を変えるべきか否か決められない子どももいたが、自分なりの意見をまとめた。また、卍マークを使い続けるべきか否かどうかについて伝えるときに必要な英語表現の確認をしたり、仲間や ALT に相談したりして英語で言いたいことを伝えられるように準備を行った。子どもたちから仲間の意見を知りたいという要望を受け、次時に意見を共有することを伝えた。

(4) 全体で意見を交換しよう

“We should change the symbol or not.”というテーマで意見を交換した。寺院を表す卍マークを変えるべきか否かについて、思う存分に意見を出し合った。賛成する理由として次のような意見が出された。

変えるべき (賛成派)

- ・ Do you think 卍 makes Jewish people happy? I don't think so. We should stop using it. I don't want Japanese culture to hurt people in the world. (ア)
 - ・ I think temple's symbol is culture. It's Japanese culture. Foreigners can't change it. Can Japanese people change USA culture? (イ)
- など

変えないべき (反対派)

(ア, イに対する反論として)

- ・ Many foreigners are interested in Japanese culture. If we change Japanese culture, they can't learn it. It's not win-win. Changing 卍 is 本末転倒.
 - ・ We should keep using the symbol. Here's Japan.
 - ・ Using 卍 is a Japanese tradition. If we stop using it, the meaning will disappear.
 - ・ We can tell people in the world about 卍.
- など

日本文化を変えてはいけない理由

- ・ I think we can't respect others without respecting our own cultures.
 - ・ Old Japanese people tried to save Japanese culture and values. We should protect Japanese tradition.
- など

賛成反対のどちらでもないが……

- ・ I think culture should make people happy, but I think our culture is important, too.相手の文化も大事だけど、自分たちの文化を守り守りながら相手の文化も理解していくことが大切だと思う。全ての人が幸せになれるような文化はない
- など

子どもたちからは様々な意見が出された。授業者は日本文化を変えるべきかどうかについて、子どもたち自身が仲間や ALT の考えにふれ、その後どのような自分なりの意見をもったのかを大切に。「文化としては存在するけれど、時代の価値観によって変えた方がよかったり、以前の慣習として残していけばよかったりするものもある」という意見も出された。自身の文化のあるべき姿について考える機会ともなった。

また、ある子どもは最近日本国内だけでなく全世界で発売された日本企業の最新ゲーム機のボタンの話をもとに、日本で使われている○と×が海外では違う意味をもつことを全体に話した。ゲームをする際に以前は何かを決定するときは○を、取り消すときには×ボタンを押していた。しかし、海外では決定するときは×ボタンの方を押すことに馴染みがある。最新のゲーム機では、日本式ではなく、海外式が採用されていることを伝え、これもグローバル化の一つの例なのかもしれないことを訴えた。

それを聞いた他の子どもが“I was surprised, too! First I felt strange, but now I am used to using × when I play games.”と発信し、多くの

仲間の賛同を得た。

他にも、外国から非難される捕鯨や靖国神社などの問題について知る機会も設けた。特に、靖国神社については ALT から “Japanese people who died for Japan are in Yasukuni shrine as a spirit or god. I don't understand that. I will never visit the shrine.”と言われたことに子どもたちは衝撃を覚えた。日本固有の価値観や宗教観が理解されないこともあることを知り、世界の人々とながら理解し合うことの難しさを知った瞬間でもあった。異言語・異文化をもつ人々とのコミュニケーションへの難しさを感じながらも、よりよいコミュニケーションとは何かについて考えた。

意見交換を終え、最終的な自分自身の考えを子どもたちはレポートとしてまとめた。以下は子どもたちのレポートからの抜粋である。

- There is a reason to be with you, I think you need to accept even the part that you do not understand.
- Now globalism is spreading around the world. Some racism disappear in the world because racism is wrong in globalism.
- It is natural that everyone has their own values. It is not only between Japanese people and foreigners, but also among Japanese. We are different. That's not because we are from different countries.国が違うからじゃない。Difference makes new culture, opinions, and values. We have to

enjoy the difference because it will let us get new values. We need to consider other cultures as diversity. Though sometimes it is too difficult, we should respect other cultures and we should keep communicating.

- It's difficult to understand many different cultures and values because everyone thinks their own beliefs are correct. If everyone denies each other's cultures, this world will be harmful and unpeaceful. So we should know and accept people who think unlike us. We should talk with people who have different cultures and values a lot of times. Giving the children many chances to do so is better.
- Sometimes not knowing causes trouble. If we know about 卍 as a Japanese culture and we know about ハーケンクロイツ, we can tell people in the world about 卍, considering the Nazis bad history. We can say ハーケンクロイツ is very different from 卍. Japanese people don't respect Nazis.
- We don't have to change Japanese culture to match foreign cultures. All people in the world have the same cultures and values. That's not interesting. We need to be patient. We should try to talk to people who have different cultures and values and we should start to do so from our childhood.

など

成果と課題

今年度はコロナ禍のもと、ソーシャルディスタンスを保ったり会話を控えたりしなくてはならない中で、思いや考えを伝え合うための題材を実施した。しかし、そのような状況であっても「自分の意見を伝えたい」「相手はどう思っているのか」などコミュニケーションを積極的に図る子どもたちのあられが多く見られた。

1年生では、スピーチや Show and Tell で身近なものや人について紹介した。小学校での外国語活動や英語の授業で自分の思いや考えを発信することに慣れ親しんでいた子どもたちは、聞き手としてさまざまな発表を楽しむとともに、話し手としてよりよいコミュニケーションについての思いを深めた。原稿を読んでいるだけの発表者に対して「誰に聴いてほしいのか」「紙と話をしているみたいで内容が入ってこない」などの厳しい意見が出された。誰かに対して発信するときは、一人であっても多くの人であっても、相手の様子を見て話を進め、また、相手が困っている様子が見えたときには、もう一度言ったり、言い換えたりなどの工夫をする必要があることに気づいた。コミュニケーションは一方通行ではなく、相手の様子を見て、使う単語や表現を選んだり、時には相手の文化や関心に配慮し、伝える内容を精査したりすることで、より相手を意識した豊かなコミュニケーションとなっていくことを学んだ。

2年生では、最初の題材で実機を使って電話で相手と話す活動を取り入れた。子どもたちは初めて電話で英語を話すことを通して、今までジェスチャーに大きく頼って英語を話していたことを実感するとともに、音声表現のみで正確に情報と感情を表すことの大変さに気づいた。1年生のときには「伝われば『出川イングリッシュ』でもよい」「ジェスチャーでなんとかなる」と口にすることが多かった子どもたちの意識が「普段理解してもらえていたのは、聞き手が努力していたからだ」「ジェスチャーは今後も使っていきたいが、相手が苦勞することなく理解できる英語表現も追求していきたい」と大きく変わっていた。その子どもの実感をもとに1年間の題材を組んだことで、相手や伝えたい内容に配慮して、使う言葉や表現を主体的に選択しながら表現する子どもの姿を多く見ることができた。また、声のトーンやピッチ、リズムの付け方を工夫して、より豊かに伝えようとすることができた。

3年生では、ディスカッションやディベートを中心に行い、「世界の人々をつなげる人」に迫った。相手の意見と自分の意見を絡めて発言する様子や、相手の英語が聞き取れなかったり理解できなかったりしたときには、そのままにせず互いを理解し合おうという姿勢が見られた。テーマが人種差別、異文化間の偏見やトラブルなどの社会問題を扱ったが、自分なりの意見を持ち、仲間と意見交換をして、自分自身の意見をまとめていった。仲間や ALT の意見を聞いて、自分の価値観を見直したり、新たな価値観にふれ自分の意見が変わったりすることも多くあった。また、クラスの仲間であっても自分と意見が大きく異なり、互いに意見をぶつけ合う場面もあった。価値観が異なる相手だからこそ、相手の思いや考えをふまえながらコミュニケーションをとり、自分の意見を整理して伝えようとする姿も見られた。これらはまさに、英語科が願う子どもの学びであり、より豊かなコミュニケーションが体現されたあらわれだといえる。英語でのコミュニケーションの本質を3年間体感した子どもたちが、卒業後にどのように世界の人々につながっていくのか楽しみである。

どの学年においても、相手を意識しながらコミュニケーションをとろうと努力する姿が見られたことは大きな成果である。一方で、あきらめずに既習の単語や表現で粘り強くコミュニケーションをとろうとする態度をどのように支えていくかについては、昨年度からの課題である。「伝えたい」という思いが生まれるような題材で追求する中で、子どもたちはそれぞれ異なる困難にぶつかることとなる。「伝えたい」という思いが先行して日本語で話してしまうこともあれば、英語でどのように伝えればよいのかわからずに黙ってしまうこともあるだろう。「伝えたい」内容に英語表現が追いつかずに、モヤモヤが残ることもあるだろう。このように異なるもどかしさを感じている子どもたちに、どのように授業者がかかわっていけば、子どもたちが自らその困難を乗り越えていくことができるのかについても授業実践を繰り返し、研究を進めていきたい。また、子どもたちの感情を揺さぶり、伝えたい・知りたいという子どもたちのコミュニケーション意欲をかき立てるような題材を選定し、授業構想を練っていく際に、聞く・読む・話す・書くなどの技能（英語運用能力）をバランスよく取り入れていくことも課題と感じている。今後は、読む・書くこともコミュニケーションの手段であることに、子どもたちが自然と気づくことができるよう、題材との出会いの場面を工夫していきたい。